

Title	字音接辞のカテゴリー記述：連体詞型字音接頭辞を例に
Sub Title	
Author	張, 明(Chō, Mei)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2020
Jtitle	日本語と日本語教育 No.48 (2020. 3) ,p.85- 108
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	博士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20200300-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

字音接辞のカテゴリー記述

—連体詞型字音接頭辞を例に—

張 明

1. はじめに

近年の字音接辞の研究は、個々の、あるいは複数の字音接辞を取り上げ、意味・機能について詳しく論じる研究だけでなく、字音接辞を何らかの基準に基づき分類し、その分類結果の全体像を示す研究も見受けられるようになってきた(山下(2018)、張(2018a))。しかし、ある特定のカテゴリーを取り上げ記述する研究はまだない。

筆者はこれまで連体詞型字音接頭辞の研究として、「同」(張(2016))、「各」(張(2017))、「両」(張(2019b))、「某」(張(2020 予定c))など、個々の連体詞型字音接頭辞を取り上げて、その意味・機能について論じたことがある。また、「本・当」(張(2019a))、「全・総」(張(2020 予定b))、「昨・今・来」(張(2020 予定a))など、類義関係や対義関係にあるものの意味的關係を明らかにする研究を行ってきた。しかし、連体詞型字音接頭辞の全体像について論じる機会がなかった。そこで、本稿では「連体詞型字音接頭辞」というカテゴリーに焦点を当て、連体詞型字音接頭辞にはどのようなものがあるのか、どのような特徴を持っているのかについて、筆者のこれまでの研究をふまえながら論じることとしたい。

2. 字音接辞について

2.1 字音接辞とは

本稿の字音接辞とは、山下(2018)、張(2018a)にしたがって、「新[・]チー

ム・脱原発・未発表・感情的・映画化・勉強家」の「新・脱・未・的・化・家」のように、主に二字以上の漢語や和語、外来語に前接または後接して合成語を形成する字音形態素のことを指す。「新・脱・未」のように、二字以上の漢語や和語、外来語に前接して合成語を形成するものは字音接頭辞、「的・化・家」のように、後接して合成語を形成するものは字音接尾辞であるとされている¹。

字音接辞に関しては上のようにとらえ、以下の3点のような立場をとることにする。

第一に、一般的に接辞が持つ性質として認識される「単独で語を構成することができないこと」「形式的な意味を表すこと」等を字音接辞であるかどうかを判断するに当たっては重要視しない。

第二に、字音接辞であるかどうかを判断するときに、最も重要なのは「どのような言語単位と結合するか」ということである。ある字音形態素が二字以上の漢語や和語、外来語と結合する以上、その字音形態素が単独で語を構成することができるとしても、形式的な意味を表さないとしても、字音接辞として認める。

第三に、一字漢語と結合して二字漢語を形成する字音形態素は字音接辞として認めず、「二字漢語の構成要素」と呼ぶ。語源的な観点ではなく、現代日本語の語構成意識を重視し、二字漢語を単純語として取り扱うからである。

具体例を挙げて、確認しておこう。

- (1) 式を挙げる 式で表す
- (2) 卒業式 結婚式 スパルタ式 電動式 方程式
- (3) 形式 旧式 公式

(1)の「式」は単独で使われるため、語基である。(2)の「式」は二字以上の漢語や和語、外来語に後接して合成語を形成するため、字音接辞である。(3)の「式」は一字漢語と結合して二字漢語を形成するため、二字漢語

表1 字音接辞研究の概観（山下 2013a より）

文法論による研究	山田孝雄（1936） 松下大三郎（1930）	語構成論と文法論全体の体系との関連が考慮されたもの
	森岡健二（1994）	文法研究の中で、語構成要素を体系的に捉え、論じたもの
語彙論・意味論による研究	山田孝雄（1940）	語の構成、構成要素の意味的關係に注目した記述がある
	斎賀秀夫（1957）	合成語全体について、語構成を論じたもの
	野村雅昭（1973）	否定の接頭語がどのような意味的性格を持った語と結合するか、また、結合したことによって、結合形全体がどのような意味を表すかという点を検討したもの
	野村雅昭（1978）	漢語接辞について、その種類を明らかにし、包括的な分類、分析を行った嚆矢となる論考
生成文法の理論による研究	影山太郎（1999） （2007）	クオリア構造の理論を用いた研究
	小林英樹（2004）	語彙概念構造の理論を用いた研究
	杉岡洋子（2009）	統語論への広がりを示す研究
認知言語学による研究	吉村公宏（2003） 山下喜代（2011）	ネットワーク・モデルを用いて、接辞の多義性を捉える
	中島晶子（2010）	認知言語学的視点

の構成要素である。本稿は水野（1987）、山下（2013b）と同様に、具体的にどのようなに使われるかによって、「式」は語基にも接辞にもなり得るという動的な見方で考えることとする。

2.2 字音接辞研究の位置づけ

字音接辞研究史を概観するものには、山下（2013a）がある。本節では、山下を参考にしながら、これまでの字音接辞研究を表1のようにまとめた。これに基づいて、本稿の立場をどのように位置づけるのかを確認しておく。

本稿は、網かけで示した野村（1973）と同様の手法でアプローチし、連

体詞型字音接頭辞を考察する。野村（1973）と同様の手法で字音接辞を考察するものは、山下の一連の研究（山下 1997、1998、1999、2003 など）がある。筆者も、その流れを引き継ぐ立場から、連体詞型字音接頭辞の造語機能について分析する。

3. 字音接辞のカテゴリーとしての「連体詞型字音接頭辞」

連体詞型字音接頭辞は字音接（頭）辞のカテゴリーの一つである。本節では、先行研究における連体詞型字音接頭辞の位置づけを確認したい。

3.1 野村（1978）

野村（1978）は現代新聞の用例をもとに、接辞性字音語基の用法の分類について詳細な考察を行っている。前部分の接辞性語基の分類は、「前部分語基と後部分語基の品詞性、および、その結合関係によったものである（野村 1978: 112）」とし、異なり語数 250 の前部分の接辞性語基を「①体言型」「②連体修飾型」「③連用修飾型」「④連体詞型」「⑤用言型」「⑥否定辞型」「⑦数量限定型」「⑧敬意添加型」の 8 つに分類する。そのうち、「④連体詞型」は以下のようなものがあるという。

- (4) ④連体詞型…同（～議員）・本（～〇日）・前（～会長）・現（～総裁）・旧（～陸軍）・今（～国会）・来（～シーズン）・故（～〇〇氏）・副（～総理）・準（～決勝）・全（～日本）・総（～選挙）・各（～省庁）・両（～陛下）・諸（～外国）（同：112）

また、連体詞型についての考察をまとめると、以下の通りである。

第一に、前部分語基と後部分語基のあいだに、ポーズがおかれるものがあること、第二に、「文脈内での指示、他者との関係の表示、範囲・量の限定など、直接、内容にかかわらないものといった特徴をあげることができ」る（野村 1978: 113）ということである。第三に、連体詞型は、「⑥否定辞型」の「非-」、「⑤用言型」の「反-」と「超-」とは別の意味を表すが、似た構造も持っている。「非-」グループは「A トハ別種ノ A」という

意味構造であるのに対して、連体詞型の「同ー」を例にすると、「別種ノ A デハナイ、ソノ A」という意味構造である。本稿の連体詞型字音接頭辞は、野村（1978）からの示唆が大きい。

3.2 山下（2013b、2018）

連体詞型字音接頭辞と似たカテゴリーとしては、「指定」がある。山下（2013b、2018）は国語辞典などの資料に見出し語として収録されている「接辞」と「造語成分」を抽出した。そのデータに基づいて、字音接辞を意味によって分類している。指定というカテゴリーには以下で示すものがある²。

- (5) 右大臣 皆保険 各学校 該事件 既発表 原材料 現会長
 後半生 今学期 権宮司 再稼働 昨年度 諸問題 従三位
 准教授 準決勝 先住民 全世界 曾祖父 他大学 第三者
 当劇場 同世代 南氷洋 副学長 毎土曜日 明五月三日
 翌十日 両先生 極陰性 前首相 来学期 次年度 本年度
 一個人 別世界 正二位 某青年 (山下 2018: 221)

本稿では、字音接辞を品詞的に分類し、「連体詞型」という分類を立てた。一方、山下（2013b）（2018）は、字音接辞を意味によって分類し、「指定」というカテゴリーを立てている。しかし、字音接辞を品詞的に分類するということは、意味によって分類する側面も無視できない（張 2018a）。そのため、本稿の「連体詞型」と山下の「指定」とで外延が一致するものが多いのはむしろ当然かもしれない。

3.3 張（2018a）

張（2018a）は国語辞典 7 種を参照し、そこに挙げられた用例から字音接辞を選定し、品詞的に分類することを試みた。字音接頭辞は「①名詞型」「②形容詞型」「③連体詞型」「④副詞型」「⑤動詞型」「⑥助動詞型」「⑦助詞型」「⑧接続詞型」の 8 種に分類している。そのうち、連体詞型字音接頭辞は以下のようなものがある。

- (6) 亜 (亜熱帯)、該 (該問題)、外 (外祖父)、各 (各大学)、現 (現首相)、原 (原判決)、故 (故博士)、後 (後半分)、今 (今世紀)、再 (再来週)、昨 (昨シーズン)、支 (支金庫)、次 (次亜硫酸)、従 (従三位)、准 (准教授)、準 (準会員)、諸 (諸問題)、助 (助監督)、正 (正二位)、全 (全責任)、曾 (曾祖父)、総 (総収入)、続 (続膝栗毛)、当 (当劇場)、同 (同商会)、半 (半永久的)、汎 (汎アメリカ)、副 (副収入)、某 (某政治家)、本 (本研究所)、毎 (毎日曜日)、明 (明年度)、唯 (唯技術主義)、翌 (翌八年)、来 (来学期)、両 (両チーム)、一 (一研究者)、旧 (旧日本軍)、正 (正会員)、先 (先場所)、前 (前学長)、他 (他方面)、分 (分教場)

また、連体詞型字音接頭辞は後接語基に対して連体修飾的な機能を持つという点で形容詞型字音接頭辞と同じであるが、連体修飾のタイプが異なる(4.1参照)と指摘している。

4. 連体詞型字音接頭辞の定義

4.1 内包的定義

3.3で述べたように、連体詞型字音接頭辞は形容詞型と同様に、接頭辞が後接語基に対して連体修飾的な機能を持つ。しかし、連体修飾には2種類ある。金水(1983: 123)によると、意味の面から連体修飾を考えると、その機能を大きく二つに分けて考えることができる。一つは名詞句の概念の限定・修飾であり、もう一つは名詞句の指示機能に関する性格付けである。形容詞型は、金水(1983)の「名詞句の概念の限定・修飾」、村木(2012)の「装飾的な規定」、高橋(1997)の「カザリツケの規定語」に相当するものである。それに対し、連体詞型は、金水(1983)の「名詞句の指示機能に関する性格付け」、村木(2012)の「限定的、指定的な規定」、高橋(1997)の「キメツケの規定語」に相当するものである。

4.2 外延的定義

連体詞型字音接頭辞は(6)で示した43の字音接辞があるが、さらなる精査が必要である。

まず、除外する候補として、次のようなものが挙げられる。「該問題」の「該」、「従三位」の「従」、「正二位」の「正」、「外祖父」の「外」、「曾祖父」の「曾」、「再来週」の「再」、「唯武器論」の「唯」、「支金庫」の「支」、「分教場」の「分」、「次燐酸」の「次」、という10形式である。除外する理由は主に2つある。一つは、「該問題」「該人物」の「該」のように、現代日本語では使われていないからである。もう一つは、「曾祖父」「曾祖母」の「曾」のように、ほかの語とほとんど結合できず、生産性が低いものだからである。

次に、新たに加える候補として、「当該チーム」の「当該」を連体詞型字音接辞に加えたい。張(2018a)の抽出方法は、漢字一字の字音接辞は抽出できるが、漢字二字のものは抽出できない。しかし、張(2018b)では、字音接辞に性格の類似する二字漢語「当該」が「当該五輪」「当該取り組み」「当該レース」のように、二字以上の漢語や和語、外来語に前接して合成語を形成する用例が抽出された³。また、「当該」の後接語は一定の語に集中することがなく、一定の生産性も見受けられる。以上の点からすれば、「当該」は漢字二字ではあるものの、字音接頭辞として十分な資格を持っていると考えられ、連体詞型字音接頭辞として認めることとしたのである。したがって、最終的に連体詞型字音接頭辞として認められるのは $43 - 10 + 1 = 34$ 形式になる。

5. 連体詞型字音接頭辞の考察意義

ここで、連体詞型字音接頭辞を考察する意義について3点述べておきたい。

第一に、連体詞型字音接頭辞を一つのカテゴリーとしてその全体像を詳細に記述する研究はない。字音接頭辞は接尾辞と比べ、種類が少ないうえ

に、品詞決定機能を持っていないため、研究が進んでいないのが現状である。その中に、特に今まで注目されていなかった、かつ「もっとも問題がおおい」(野村 1978: 113)「連体詞型」を考察する意義があると考ええる。

第二に、連体詞型字音接頭辞は種類が豊富で、類義関係や対義関係にあるものが多い。例えば、「その、今話題にしている」という意味で類似する「本」と「当」や、「それぞれの」という意味で類似する「各」と「毎」、「すべての」という意味で類似する「全」と「総」などのように、類義関係にあるものが多い。また、「前年度」「今年度」「来年度」のように、対義関係にあるものもある。山下 (2013b: 91) では、類似する意味や機能のあるものや、対義関係にあるものについて、造語機能はどのように記述できるのか具体的に検討することが課題になるとの指摘がある。そこで、本研究は、類義関係や対義関係にある字音接頭辞を積極的に取り組み、類義関係や対義関係にあるものが多い「連体詞型」に注目することは意義があると思う。

第三に、連体詞型字音接頭辞の一部は指示詞や照応と関わりがある。例えば、連体詞型字音接頭辞である「当」「本」「同」は、指示詞である「この」「その」と類似する機能を果たす。また、「各」「両」「現」「前」「旧」なども照応用法があることを指摘する。日本語研究ではコソアについて活発に議論されているが、字音接頭辞と指示詞や照応との関係についての議論はほとんどない。指示詞や照応と関係がある連体詞型字音接頭辞を研究することによって、指示詞研究にも資するところがあると思われる。

以上の3点を連体詞型字音接頭辞を考察する意義として主張したておきたい。

6. 連体詞型字音接頭辞の造語機能の分析

山下 (2013b) においては、字音接辞の造語機能には、「結合機能」「意味添加機能」「品詞添加機能」「文法化機能」の4つがあることが指摘されている。本研究もそれを支持し、字音接辞には、その4つの造語機能がある

ことを認める。

まず、結合機能とは、「どのような語基と結合し、合成語を形成するのか」(山下 2013b: 85)ということである。山下(2013b: 86)で指摘されているように、結合機能はすべての字音接辞に関わるものである。結合機能に関しては、主に結合する語基の語種と意味分野という2点を中心に記述することが多い。

次に、意味添加機能とは、字音接辞が「どのような意味をもち、合成語全体の意味にどのように関与するのか」(山下 2013b: 85)ということである。結合機能と同様に、意味添加機能もすべての字音接辞に関わるものである。

さらに、品詞決定機能とは、「合成語の品詞性を決定する機能」(山下 2013b: 85)のことである。山下(2013b)で、品詞決定機能を持つ字音接辞の例として挙げられたのが接尾辞の「化」「的」と接頭辞の「無」である。「近代化」に「する」が後接してサ変動詞になる。「化」は、もともと名詞である「近代」に後接して合成語全体をサ変動詞にすることができる。それが「化」の品詞決定機能である。「無責任」「効果的」に「な」が後接して、合成語を形容動詞にすることができる。

最後に、文法化機能とは、「一部の接辞性字音形態素が語のレベルを超え、句または文レベルの言語単位に結合して助辞的な機能を発揮すること」(山下 2013b: 86)である。例として挙げたのは、(7)の「式」と(8)の「的」の例である。

(7) 男のコロシ文句は直球型が多いが、それにくらべて女のほうは、
「課長の背中見ているの好きなんです」式のひねりのきいたものが
目立つ。 (山下 2013b: 86)

(8) 「皆がやっているから私もやる」的な発想は大嫌いなのだ。(同上)
もともと、「電動式」や「理想的」のように、語レベルと結合する「式」「的」が、(7)(8)のように、句または文レベルの言語単位と結合する現象

がある。

本稿の研究対象である連体詞型字音接頭辞は、結合機能と意味添加機能しか持っておらず、品詞添加機能と文法化機能を持っていない。よって、結合機能と意味添加機能を中心に見ていく。

6.1 生産性から考える結合機能

前述したように、個別の字音接辞の造語機能を分析する場合、主に結合する語基の語種と意味分野という2点を中心に記述するが、紙幅の関係で全ての連体詞型字音接頭辞を逐一分析する余裕はない。ここでは、字音接辞のカテゴリ記述の場合に「生産性」から結合機能を検討する方法を提案する。

6.1.1 生産性と生産性指数

中俣(2015a)で指摘されたように、「従来、「生産性」は主として接辞研究の文脈で使用されてきた用語である」(p.275)。しかし、接辞研究において、「生産性が高い」「生産性が低い」といった記述は見られるが、高いか低いかわかる客観的な基準が見られない。その客観的な基準を論じたのは中俣(2015a, b)の初級文法項目の生産性についての研究である。本稿は中俣(2015a, b)が提案した「生産性指数」を用いて連体詞型字音接頭辞の生産性の高低を示す。

本稿は中俣(2015a)に従って、生産性とは以下のように定義される。

- (9) ある形式 X が一定の関係 R で結びつく要素の多寡の度合い P を生産性と呼ぶ。 (中俣 2015a: 275)

本稿においては、 X は連体詞型字音接頭辞となり、 R を後接語に絞る。その上で、コーパスの調査を元に生産性 P の高低を示す。その生産性 P の高低を計算する方法は中俣(2015a, b)が主張した「生産性指数」を用いる。中俣(2015a, b)を参考に、生産性指数は以下の式で示される。

- $$(10) \text{生産性指数} = \frac{\text{異なり語数}}{\text{延べ語数}}$$

表2 連体詞型字音接頭辞の生産性

順位	字音接頭辞	異なり語数	延べ語数	生産性指数
1	各	3890	17394	29.50
2	旧	1983	5428	26.92
3	某	733	1153	21.59
4	全	1833	8226	20.21
5	両	971	3441	16.55
6	一	987	3706	16.21
7	総	871	7220	10.25
8	本	541	3246	9.50
9	現	405	2203	8.63
10	諸	726	7135	8.59
11	前	515	5320	7.06
12	当	233	1119	6.97
13	準	241	1370	6.51
14	他	242	1488	6.27
15	半	288	2152	6.21
16	後	59	269	3.60
17	副	255	5623	3.40
18	原	126	1400	3.37
19	汎	30	82	3.31
20	毎	65	458	3.04
21	正	73	1548	1.86
22	垂	39	546	1.67
23	先	16	97	1.62
24	准	19	196	1.36
25	故	21	559	0.89
26	今	25	1358	0.68
27	翌	26	1882	0.60
28	来	10	517	0.44
29	助	12	794	0.43
30	明	3	55	0.40
31	昨	8	503	0.36
32	続	2	209	0.14

(10) により、連体詞型字音接頭辞の生産性を計算し、示すと表2のようになる。

6.1.2 生産性の高低

生産性指数が15以上で、生産性が高い字音接頭辞は、「各」「旧」「某」「全」「両」「一」の6つである。「各」と「全」は延べ語数が多く、使用頻度が高い。そのため、生産性も高いと考えられる。一方、「旧」「某」の延べ語数は決して多い数字ではないが、異なり語数が多く、使用頻度が高く繰り返して出現する後接語が少ない。そのため、生産性が高いと考えられる。

生産性が低いものも同様に2つのパターンがある。生産性指数が5以下で、生産性が低い字音接頭辞は17も存在する。「汎」「先」「明」などはそもそも延べ語数が低く、使用頻度が低いため、生産性も低いと考えられる。一方、「副」「原」「正」「今」のように、延べ語数がけっして少なくないが、使用頻度397の「副社長」、664の「原材料」、613の「正社員」、725の「今年度」のように、使用頻度が高く、繰り返して出現する後接語が多いため、生産性が低いと考えられる。

6.1.3 問題点

生産性指数を計算するに当たり、いくつかの問題が残ったことをここで断っておく。

まず、「同」「当該」が含まれていないことである。表2で示したデータはBCCWJで検索し、計算したデータである。「同」と「当該」のデータはBCCWJではなく、読売新聞データベース『ヨミダス歴史館』から収集した⁴。使用データが異なることから、「同」と「当該」は含まれていない。

次に、固有名詞に接続する「現」の扱いである。張(2020 予定 a)では、「現」には(11)のような修飾用法と(12)のような照応用法を持っていることを明らかにした。

- (11) このような政府の姿勢は、現政権の弱さに起因しているところが大きいと考えられる。 (張 2020 予定 a: (1))

- (12) そこで、大阪市は、大正3年東京高等商業（現一橋大学）の教授の職にあった関一を大阪市に招き、助役に就任させた。

（張 2020 予定 a: (2)）

このような照応用法の「現」は固有名詞と結合する。「前」と「旧」も同様である。後接語が固有名詞である場合はカウントするかしらないかについては更なる検討が必要であるが、現段階ではそのデータは使用しないことにする。そのため、「現」「前」「旧」のデータには照応用法は含まれていない。

また、固有名詞と関係するが、「翌」の後接語が年月日（例：「翌 1925 年」「翌 7 月 21 日」等）、「続」の後接語が作品名（例：「続比較演劇学」「続粹考略図」等）、「故」の後接語が人名（例：故佐藤栄助氏、故清水宏監督等）である場合は、異なり語数が 1 とカウントする。

最後に、「一」と「後」のデータについてである。「一」を BCCWJ で検索したところ、194242 件の検索結果を得た。膨大であるため、100000 件を無作為抽出した。その中で、「一社員」「一市民」のような連体詞型字音接頭辞は異なり語数 508、延べ語数 1908 件存在する。単純計算で、194242 件なら異なり語数 987、延べ語数 3706 になるため、そのデータで生産性指数を計算した。「後」については、「後」という字は、「のち」「あと」「ご」「こう」など多様な読み方がある。確実に「こう」と読む用例を判断することが難しい⁵。「後」の異なり語数「59」と延べ語数「269」は、あくまでも「後」という字が接頭辞として用いられる用例数で、必ずしも「こう」と読むとは限らない。

このように、データに操作を加えたものがあることを、調査上の問題点として付記しておく。

6.2 指示詞的用法から考える意味添加機能

結合機能と同様に、多くの字音接頭辞が共通して持つ意味的特徴について検討することを提案する。

連体詞型字音接頭辞の中に、指示詞的用法を持つものが少なくないた

め、指示詞の用法から分析することにする。指示詞の用法を持つと考えられるのは「本」「当」「同」「両」「各」「某」「現」「旧」「前」の9つである。本節では、これらがどのような指示詞的用法を持つか、なぜ指示詞的用法を持つかについて論じる。

本稿では、「本」「当」「同」「両」「各」「某」「現」「旧」「前」の9つの字音接頭辞を大きく2種類に分ける。第一に、名前の部分（＝固有名に当たる部分）が字音接頭辞によって置き換えられ、カテゴリー情報を示す部分の追跡によって指示詞的用法を持つタイプである。このようなタイプは、「本」「当」「同」「両」「各」「某」の6つがある。第二に、先行表現の直後に来る丸括弧の囲みなどによって表示される補足情報によって指示詞的用法を持つタイプである。このようなタイプは、「現」「旧」「前」の3つである。

6.2.1 タイプ1の「某」

まず、「某」は不定指示という点で定指示の「本」「当」「同」「両」「各」と異なる。

張（2020 予定c）によると、「某」の指示対象は固有名を持っており、「某」とはその固有名の部分何らかの理由によって明かさないという表現である。「某」が持つ不定機能は固有名の部分明かさないことから生じるもので、語として本来的に持つ機能ではない。「某+後接語」は固有名詞に近い性質と、不定の意味を表す連体詞「ある」には見られない性質を持っていることが特徴である。

次に、固有名詞と「某+後接語」の性質を比べるために、(13) (14) の例で検討してみよう。固有名詞は (13) のように、「その」などの指示表現や人称代名詞を用いることは必須でなく、1 回目に出現する同じ形式で再度出現し、指示対象を指し示すことができる。また、(14) のように、主題に現れることもできる。

- (13) 山田牧場の生キャラメルよりは少し硬いですが、口に入れると溶けてきておいしいです。この材料に生クリームと水飴を足せば、

山田牧場の生キャラメルのレシピですね。

(張 2020 予定 c: (26))

- (14) 山田損保会社は「皇紀」を使用しているので、二千年問題は難なく乗り切ったという例もあります。 (張 2020 予定 c: (27))

「某」も固有名詞に類似した性質を持っていると考えられる。そのため、固有名詞と同じく (15) のように、1 回目に出現する同じ形式で指すことも、(16) のように、主題に現れることもできる。

- (15) 某牧場の生キャラメルよりは少し硬いですが、口に入れると溶けてきておいしいです。この材料に生クリームと水飴を足せば、某牧場の生キャラメルのレシピですね。 (張 2020 予定 c: (28))

- (16) 某損保会社は「皇紀」を使用しているので、二千年問題は難なく乗り切ったという例もあります。 (張 2020 予定 c: (29))

一方、「ある」は語として不定機能を持ち、不定機能を持つ形式の典型的な存在である。そのため、同じ形式が再度出現することも、主題に出現することもできない。

6.2.2 タイプ 1 の「本」「当」

「本」は (17) (18)、「当」は (19) (20) で示すように、指示詞的用法を持つ。

- (17) 第 2 期科学技術基本計画においては、優れた成果を生み出す科学技術システムを実現するための柱のひとつとして、評価システムの改革が挙げられている。本基本計画に基づき、……。

(張 2019a: 47)

- (18) 6. 鉄鋼委員会 本委員会は、78 年 10 月に設立され、OECD 加盟二十カ国及び EC が参加しており、……。7. 科学技術政策委員会 本委員会は、各国の科学技術政策の立案、実施についての意見交換を行う場として設けられた。 (張 2019a: 42)

- (19) 工務店等向けに障害のある人にも対応した「高齢化対応住宅リフォームマニュアル」を作成し、その普及を図るとともに、増改

築相談員等に対し、当マニュアルを用いて研修を行っている。

(張 2019a: 42)

- (20) 今回、ダートマス大学の招きに応じたのは、当大学の図書館の資料をかつて利用していたことに対する感謝の気持ちの表現だとされている。

(張 2019a: 41)

「本」と「当」は、名前の部分「鉄鋼」「高齢化対応住宅リフォーム」がそれぞれ「本」「当」によって置き換えられ、カテゴリ情報を示す部分「委員会」「マニュアル」の追跡によって、「本」と「当」は先行表現を指し示すことができる。このように、「本」と「当」は指示詞的用法を持つのである。

両者の違いについては、張(2019a)で「本」は「この」との性質が一致する点が多く、「その」との類似点を持っていないのに対し、「当」は「本」と比べ、「この」との類似性が弱く、「その」との類似性もあるとすでに指摘した。また、「本」には(18)のように、テキストダイクシスと考えられる用例があるのに対し、「当」には存在しない。

また、「本」「当」は照応表現だけでなく、(21)(22)の直示表現も見られる。

- (21) 開始式で同協会会長の■■■■■さんは、「二年前から本協会と丹波自然運動公園が共催し、行政の手を借りない手作りの大会として新たな歴史を刻んできた。……」とあいさつ。

(張 2019a: 45)

- (22) 資格商法と不実告知ケース6 Xの勤務先に、Y企業経営協会から電話があり、「当協会で開いている講座を受講すれば、企業経営コンサルタントの資格を取得できます。この資格は、……。

(張 2019a: 45)

張(2019a)は、直示表現の「本」「当」は話し手が自分側と関係している何かを改まりの気持ちで指す点で共通すると述べ、両者の違いは「心理的立場関係」によって説明している。すなわち、話し手の心内に帰属意識や

誇りといった感情が現れ、聞き手と心内で同じ立場関係にあると認識する場合は「本」が用いられるのに対し、話し手が心内で聞き手に対して対立的な立場関係と認識する場合は「当」が用いられると解釈している。

6.2.3 タイプ1の「同」

張(2016)によると、カテゴリー情報を示す部分が同一指示を保証する部分であり、それを除いた部分、すなわち名前の部分を「同」で置き換え、「同+カテゴリー情報を示す部分」で先行表現を指し示す。次の(23)～(25)のような用例がある。

- (23) ……試合が19日、高崎市の高崎八千代グラウンドで行われ、高崎商と樹徳が勝ち上がった。1回戦の残り2試合は20日に同グラウンドで行われる。(張2016: 84)
- (24) 日本書芸美術院の公募書道展「日書美展」が、岸和田市立文化会館(荒木町)で開かれ、……また、同美術院理事長の樽谷龍風さん(84)の作品は気迫にあふれて深みがあり、……。 (張2016: 88)
- (25) 青森ピンクリボンプロジェクト実行委員会が主催。……同プロジェクトは「気軽に足を運んでもらい、乳がん検診への理解を深めてほしい」と……。 (張2016: 95)

名前の部分「高崎八千代」「日本書芸」「青森ピンクリボン」が「同」によって置き換えられ、カテゴリー情報を示す部分「グラウンド」「美術院」「プロジェクト」の追跡によって、「同」は先行表現を指し示すことができる。このように、「同」は指示詞的用法を持つのである。

また、カテゴリー情報を示す部分の追跡だけでなく、「同」という漢字が持つ「(前と)同じ」という意味からしても、前文脈のどれを指すかが比較的わかりやすい。そのため、(24)のように、「同美術院」の直後に「理事長」を付け加えるという言語単位の拡張や、(25)のように、先行表現「青森ピンクリボンプロジェクト実行委員会」の一部「青森ピンクリボンプロジェ

クト」のみを切り取って用いた場合も使用可能である。

6.2.4 タイプ1の「両」「各」

張(2019b)では、「両」は照応表現を持っていることを明らかにした。

(26) 第2点は、都市用水部門のほとんどに適用される今渡ルール、馬飼ルールが有機的に連動していないことから、木曾川河川水の有効利用を妨げていることである……両ルールの内容を見ると、……。(張 2019b: 120)

(27) また交渉当事者の野村、来栖両大使も、通牒を手交したあと、……。(張 2019b: 120)

(26)の「両ルール」は、点線で示した先行する「今渡ルール」と「馬飼ルール」を指し示す照応表現であることは問題ない。しかし、(27)の「両大使」も照応表現と言えるのかについて疑問を感じる。(27)の「両大使」だけでは、「二人の大使」という意味にしか読み取れない。三者以上存在する「大使」の中のどの「二人の大使」を指すかは、前文脈に出現した「野村、来栖」を参照しないと決まらないはずである。よって、(27)の「両大使」は、既出の「野村、来栖」という二人の大使を指し示す照応表現であると言える⁶。

さらに、「両」は直示表現の用法もある。(28)は国会会議録の用例であり、「両先生」はその場にいる先生2名を指す直示表現である。

(28) 今両先生からそういう御回答をいただいて、私どもも非常に心強く感じたわけでございます。(張 2019b: 121)

張(2019b)では、「両」が照応表現と直示表現を持っている理由について、岩田(2013)の数量詞代名詞的用法という概念によって説明できると考えた⁷。「両」は数量詞としての2という数を表すため、代名詞的用法を持つ可能性があり、そのため、照応表現と直示表現を持つと考えられる。

一方、「両」と比べ、「各」は名詞句外照応と直示表現を持っておらず、名詞句内照応しか持っていないと思われる。

(29) 折り込みを予定している新聞は、読売・朝日・毎日・東京・日本経済・産経・埼玉新聞の各朝刊です。 (張 2017: 39)

(30) 午後1時から今泉小学校・西小学校・瓦葺中学校各PTAによる実践報告会を行います。 (張 2017: 39)

(29) の「各」はその直前に出現した「読売～埼玉新聞」を指し、(30) も「今泉小学校～瓦葺中学校」を指し示す名詞句内照応である。

6.2.5 タイプ1のまとめ

以上のように、名前の部分が字音接頭辞によって置き換えられ、カテゴリー情報を示す部分の追跡によって指示詞的用法を持つ「本」「当」「同」「両」「各」「某」を見てきた。

「某」は不定指示で、指示的用法をもつものの中ではほかと異なる。定指示の「本」「当」「同」「両」「各」の中で、「本」「当」の指示性が高い。その理由は二つある。第一に、指示詞的用法でない場合が存在しない。第二に、直示表現と照応表現の2用法を持っている。「両」は、「本」「当」と同様に、直示用法と照応用法の2用法を持っているが、「両手」「両脇」「両扉」「両ハンドル」のように、指示詞的用法でない場合も存在する。そのため、「本」「当」より指示性が低い。次に、「同」は照応表現しか持っておらず、直示表現を持っていない。さらに、「同学年」「同世代」のように、指示詞的用法でない場合も存在する。そのため、「同」は「本」「当」「両」より指示性が低い。最後に、「各」は照応用法を持っているとはいえ、名詞句内照応に限定されている。直示用法も持ってない。また、「各言語」「各部分」のように、指示詞的用法でない場合も存在する。指示性に関してはタイプ1の中で最も低いと思われる。

6.2.6 タイプ2の「現」「旧」「前」

本節では、先行表現の直後に来る丸括弧などによる補足情報によって指示詞的用法を持つタイプの「現」「旧」「前」の三つを取り上げる。

- (31) そこで、大阪市は、大正3年東京高等商業（現一橋大学）の教授の職にあった関一を大阪市に招き、助役に就任させた。

（張 2020 予定 a: (2)）

- (32) 日本の銀行は財務省（旧大蔵省）の影響が強いので半国有化みたいなものですよ。

（張 2020 予定 a: (12)）

- (33) アメリカから十年遅れて、日本でもそうした気運が高まり、室伏靖子（前、京都大学）がオーガナイザーとなって、……。

（張 2020 予定 a: (9)）

指示詞的用法を持つ「現」「旧」「前」は、(31)～(33)のように括弧の中に位置し、注釈のような機能を果たす。さらに、その括弧は先行表現の直後に位置する。括弧の存在および位置によって、「現」「旧」「前」は指示詞的用法を持つことになる。

また、(34) (35)のように、括弧内に、「以下「旧〇〇／前〇〇」という」というように、明示されることによって、次に出現する際に、「旧〇〇」「前〇〇」という形で照応用法として解釈されるというタイプもある。このタイプは、「現」にはないが、「旧」「前」にはある。

- (34) 第十一条 この法律の施行の際現に附則第三条の規定による改正前の海上運送法（以下「旧海上運送法」という。）第二条第八項の海上運送取扱業について旧海上運送法第三十三条（旧海上運送法第四十四条において準用する場合を含む。）において準用する旧海上運送法第二十条第一項の届出をしている者は、……。

（張 2020 予定 a: (15)）

- (35) 一 当該中期目標の期間（以下この項及び次項において「当該期間」という。）の直前の中期目標の期間（次号において「前期間」という。）の最後の事業年度に係る整理を行った後積立金がなかったとき 当該期間の最後の事業年度に係る整理を行った後の積立金の額に相当する金額 二 前期間の最後の事業年度に係る整理

を行った後積立金があった場合であって、……。

(張 2020 予定 a: (10))

一見してわかるように、点線で示した先行表現は厳密さを追求したために表現として長くなった例である。その先行表現が何度も出現する場合、先行表現の直後に括弧内に「旧海上運送法」「前期間」という短い表現で使用されることで、照応用法として解釈されるのである。

7. おわりに

本稿は字音接辞のカテゴリーの一つである連体詞型字音接頭辞について考察したものである。連体詞型字音接頭辞は、機能としては後接語基に対し、「名詞句の指示機能に関する性格付け」(金水 1983)に相当する連体修飾的な機能を持つ。「^ア亜」「^{イチ}一」「^{カク}各」「^{キユウ}旧」「^{ゲン}現」「^{ゲン}原」「^コ故」「^{コウ}後」「^{コン}今」「^{サク}昨」「^{ジュン}准」「^{ジュン}準」「^{ショ}諸」「^{ジョ}助」「^{セイ}正」「^{セン}先」「^{ゼン}全」「^{ゼン}前」「^{ソウ}総」「^{ソク}続」「^タ他」「^{ドウ}当」「^{ドウ}同」「^{トウガイ}当該」「^{ハン}半」「^{ハン}汎」「^{フク}副」「^{ボウ}某」「^{ホン}本」「^{マイ}毎」「^{ミョウ}明」「^{ヨク}翌」「^{ライ}来」「^{リョウ}両」の計 34 形式ある。

本稿は野村 (1973) と同様の研究アプローチを用い、連体詞型字音接頭辞の造語機能を分析する。結合機能の分析については、「生産性」から検討することを提案し、生産性指数の計算・比較によって、連体詞型字音接頭辞の生産性の高低を示した。生産性指数が 20 以上で生産性が高い「各」「旧」「某」「全」もあれば、生産性指数が 1 以下で生産性が低い「続」「昨」「明」「助」もある。

また、意味添加機能の分析については、多くの字音接頭辞が共通して持つ意味的特徴、連体詞型字音接頭辞の場合は指示詞的用法について検討した。指示詞的用法を持つと考えられるのは「本」「当」「同」「両」「各」「某」「現」「旧」「前」の 9 つである。さらに、大きく 2 種類に分けられる。第一に、名前の部分が字音接頭辞によって置き換えられ、カテゴリー情報を示す部分の追跡によって指示詞的用法を持つタイプである。このようなタイプは、「本」「当」「同」「両」「各」「某」の 6 つがある。第二に、先行表現の

直後に来る丸括弧の補足情報によって指示詞的用法を持つタイプである。このようなタイプは、「現」「旧」「前」の3つである。

字音接辞のカテゴリーは、連体詞型字音接頭辞以外にもあるが、それらの分析は今後の課題とする。

註

- 1 詳細は張(2018a)を参照されたい。
- 2 太字部分が指定を表す字音接頭辞である。
- 3 読売新聞の新聞記事データベース「ヨミダス歴史館」による。
- 4 理由は2つある。第一に、「同」と「当該」は新聞記事での使用頻度が高いからである。第二に、照応と深く関わる表現であり、新聞記事が全文脈を把握しやすいからである。
- 5 複数名の日本語母語話者に収集した用例にある「後」の読み方(例:「後足部」「後銅壺」「後三者」「後工事」「後バラ肉」等)を確認したところ、「こう」と読むかわからないといった返答をいただいた。
- 6 (27)のような「両」は「A、B(の)両X」という名詞句内にしか出現しないため、「名詞句内照応」と呼ぶことにする。それに対し、(26)のような「両」は「名詞句外照応」と呼ぶ。
- 7 数量詞が代名詞的用法を持つという事実は岩田(2013)の「数量詞代名詞的用法」によってすでに指摘されており、「先行文脈に既出である、または現場に参加している指示物を数量詞が追跡する用法で、数量詞を、代名詞もしくは指示物そのものを表す名詞に置き換えることが可能なもの」と定義されている。

参考文献

- 岩田一成(2013)『日本語数量詞の諸相—数量詞は数を表すコトバか—』くろしお出版
- 影山太郎(1999)『形態論と意味』くろしお出版
- 影山太郎(2007)「接尾辞「-化」、-ize,-ifyの属性叙述機能」『人文論究』57-2. pp.19-36. 関西学院大学
- 金水敏(1983)「連体詞」『研究資料日本古典文学 第十二巻 文法』. pp.122-125. 明治書院
- 小林英樹(2004)『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
- 斎賀秀夫(1957)「語構成の特質」岩淵悦太郎・林大・大石初太郎・柴田武(編)『講座現代国語学Ⅱ ことばの体系』. pp.217-248. 筑摩書房
- 杉岡洋子(2009)「「-中」の多義性—時間をあらわす接辞をめぐる考察—」『語彙の意味と文法』. pp.85-104. くろしお出版
- 高橋太郎(1997)「連体機能をめぐって」川端善明・仁田義雄(編)『日本語文法 体系と方法』. pp.301-316. ひつじ書房
- 張明(2016)「新聞記事における字音形態素「同」の運用実態」『学習院大学人文科学論集』25. pp.77-104. 学習院大学大学院人文科学研究科
- 張明(2017)「字音接頭辞「各」について」『人文』15. pp.27-46. 学習院大学人文科学研究科

- 張明 (2018a) 「字音接辞の分類」『学習院大学大学院日本語日本文学』14. pp. 130-101. 学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻
- 張明 (2018b) 「指示詞の用法を持つ二文字音接頭辞「当該」」『学習院大学人文科学論集』27. pp. 97-122. 学習院大学大学院人文科学研究科
- 張明 (2019a) 「類義の字音接頭辞「本」と「当」について」『学習院大学国語国文学会誌』62. pp. 52-39. 学習院大学国語国文学会
- 張明 (2019b) 「字音形態素「両」に関する一考察」『日本語文法』19-2. pp. 117-125. 日本語文法学会
- 張明 (2020 予定 a) 「「時間・順序」を表す字音接頭辞の体系性」『人文』18. 学習院大学人文科学研究科
- 張明 (2020 予定 b) 「字音接頭辞「全」と「総」について」『学習院大学大学院日本語日本文学』16. 学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻
- 張明 (2020 予定 c) 「不定機能を持つ前接要素「某(ボウ)」」『日本語の研究』16-1. 日本語学会
- 中川秀太 (2010) 「字音形態素「新」の造語機能」大島弘子・中島晶子・ブラン・ラウル (編) 『漢語の言語学』. pp. 141-158. くろしお出版
- 中島晶子 (2010) 「新造語における「度」「系」「力」の用法」大島弘子・中島晶子・ブラン・ラウル (編) 『漢語の言語学』. pp. 159-176. くろしお出版
- 中俣尚己 (2015a) 「初級文法項目の生産性の可視化—動詞に接続する文法項目の場合—」『計量国語学』29-8. pp. 275-295. 計量国語学会
- 中俣尚己 (2015b) 「生産性から見た文法シラバス」庵功雄・山内博之 (編) 『現場に役立つ日本語教育研究 1 データに基づく文法シラバス』109-128. くろしお出版
- 野村雅昭 (1973) 「否定の接頭語「無・不・未・非」の用法」『国立国語研究所論集ことばの研究』4. pp. 31-50. 国立国語研究所
- 野村雅昭 (1978) 「接辞性字音語基の性格」『国立国語研究所報告 61 電子計算機による国語研究Ⅸ』. pp. 102-138. 国立国語研究所
- 松下大三郎 (1930) 『改撰標準日本文法』勉誠社
- 水野義道 (1987) 「漢語系接辞の機能」『日本語学』5-3. pp. 60-69. 明治書院
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房
- 森岡健二 (1994) 『日本文法体系論』明治書院
- 山下喜代 (1997) 「字音形態素「～式」の機能」『青山語文』27. pp. 167-179. 青山学院大学日本文学会
- 山下喜代 (1998) 「字音形態素「～風」について」『青山語文』28. pp. 151-162. 青山学院大学日本文学会
- 山下喜代 (1999) 「字音接尾辞「的」について」森田良行教授古稀記念論文集刊行会 (編) 『日本語研究と日本語教育』. pp. 24-38. 明治書院
- 山下喜代 (2003) 「字音接尾辞「化」について」『紀要』44. pp. 119-132. 青山学院大学文学部
- 山下喜代 (2011) 「字音接尾辞「式」「風」「的」の意味—プロトタイプとスキーマ—」『青山語文』41. pp. 130-142. 青山学院大学日本文学会
- 山下喜代 (2013a) 「現代日本語における漢語接辞研究の概観」『青山語文 大上正美教授退任記念号』43. pp. 157-168. 青山学院大学日本文学会

- 山下喜代 (2013b) 「接辞性字音形態素の造語機能」野村雅昭 (編) 『現代日本漢語の探究』, pp. 83-108. 東京堂出版
- 山下喜代 (2018) 「字音形態素のカテゴリー化—接辞を中心に—」『青山語文』48. pp. 217-228. 青山学院大学日本文学会
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』宝文館
- 山田孝雄 (1940) 『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館
- 吉村公宏 (2003) 「認知語彙論」『認知音韻・形態論 シリーズ認知言語学入門2』, pp. 195-239. 大修館書店

追記: 2018年9月に学習院大学大学院人文科学研究科に博士学位論文『現代日本語における字音接辞の研究—連体詞型字音接頭辞の記述的研究を中心に—』を提出しました。

プロフィール)

張明 (チョウメイ)

中国山東省出身

2012年7月に曲阜師範大学 (中国) 東方言語・翻訳学部日本語学科卒業

2015年3月に慶應義塾大学大学院文学研究科国語学専攻日本語教育学分野修士課程修了

2019年3月に学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻より、博士 (日本語日本文学) の学位を取得し、博士後期課程修了

博士学位論文題目は「現代日本語における字音接辞の研究—連体詞型字音接頭辞の記述的研究を中心に—」

2019年5月に早稲田文化館日本語科教務部専任講師に就任、現在に至る。